令和５年度　現職研修助成事業研修概要

周南市立富田西小学校

１　はじめに

本校は、周南市西部（旧新南陽市）に位置し、北に嶽山、南に瀬戸内海と周南コンビナートに挟まれ、豊かな自然や産業、あたたかい地域の人々に包まれた、全児童数６０９名、通常学級１９学級、特別支援学級４学級の学校である。学校教育目標を「夢と知恵とかかわりを追い求める学校～ふるさとを愛し、学びを楽しむ西小っ子の育成～」と掲げ、今年度は特に「子どもから」と「地域とともに」をキーワードに子どもの主体性を地域ぐるみで高めていくことを教育活動の中心に据えている。

２　研究主題

【研究主題】　課題解決に向けて、主体的に学習に取り組む子どもの育成
～「表現し合う力」を高める授業づくりを通して～

（１）研究主題設定の理由

昨年度から「課題解決に向けて、主体的に学習に取り組む子どもの育成」を研究主題に据え、研究を行ってきた。昨年度の研究では、課題意識のもたせ方を工夫することで子どもが主体的に学びに向かう姿が見られたり、振り返りの仕方の工夫により子ども自身が学びや自分の成長を実感したりすることができた。

一方で、昨年度の研究の反省として、「子どもたちが自分の意見を他者に発信する力が弱い」「子ども同士が意見を十分に交わすことができるようになるとよい」といった内容の課題が多く挙がった。

そこで今年度は、これらの本校の子どもたちの課題を「表現し合う力(※)」として、副主題に取り入れることとした。この「表現し合う力」を高める授業づくりをすることを通して、主体的に学習に取り組む子どもたちの育成をすることができないかと考えたのである。

※「表現し合う力」とは、以下の①②の両方を含めたことをいう。

①全体に向けて、あるいはペアやグループの友達に、自分の意見や考えを発表したり伝えたりする一方方向への表現活動のこと〔発信〕

②ペアやグループの友達と互いに意見を交わしながら、思考を深めたり、多様な意見にふれたりすることを目的として行う双方向のやりとりの表現活動のこと〔伝え合い〕

（２）研究の視点について

研究主題の達成に向けて、教師が取り組む二つの視点を設定した。一つは、＜視点①＞子どもの主体性を引き出すための課題意識のもたせ方の工夫。もう一つは、＜視点②＞多様な表現の場の設定と手立てについての研究である。

＜視点①＞　課題意識のもたせ方の工夫

子どもが主体的に学習に取り組むためには、子どもが学習活動に入る前にいかに課題意識をもつことができるかが重要である。ここでいう「課題意識をもつ」とは、単元のはじめや授業の序盤で子どもが「やってみたい」「調べてみたい」「解決してみたい」と学習内容に興味をもったり、「どうしてだろう？」「思っていたのと違うぞ」と疑問や矛盾を感じたりすることである。課題意識をもつことができれば、子どもの学習や表現に対する主体性は高まるのではないかと考えた。

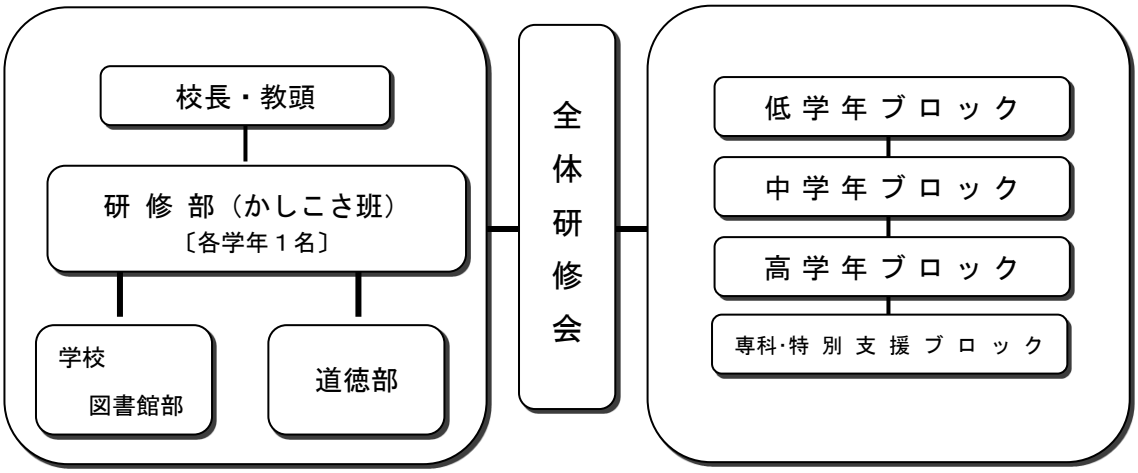
「単元を通した課題意識」や「本時での課題意識」をもたせるために、提示する教材・教具、発問

などの様々な工夫や、後に示す＜視点②＞への効果についても研究していくこととした。
＜視点②＞　多様な表現の場の設定と手立て
　本校の子どもたちの課題である「自分の意見を他者に発信する力」や「互いに考えを伝え合う力」などの「表現し合う力」を高めるためには、学習過程の中に多様な表現の場を設定する必要がある。「表現」といっても、発表、意見の交流、他者の考えと比較、課題解決に向けた協議など様々な活動が考えられる。さらに、表現の場は、導入、展開、終末など学習過程の様々な場面で設定できる。
　また、表現の場では手立ても必要である。例えば、表現の前に自分の考えをもつことが必要な場面もあるだろうし、ICT を活用して可視化することが有効な場合もあるだろう。他にも、自分の思いや考えを思わず発信したくなる発問や、学習形態をペア・グループ・自由に・意図的に組んだ相手となど工夫することも表現活動の活性化につながる。
　このように日々の授業の中に多様な表現の場を設定するとともに、適切な手立てを行うことで子どもの「表現し合う力」を高めていくことが可能となる。さらには、表現することに楽しさを感じたり、表現したことで考えの変化や深まりを実感したりすることが、子どもたちのより主体的な学びにつながるのではないかと考えた。
　＜視点②＞にも関係する「表現し合う」ための根底には、「話す・きく」の基礎が関係している。昨年度同様、これまで教員で共通理解してきた「西小の学び」(話す・きく編)の内容をもとに、内容を精選して子どもにアンケートを行う。アンケート結果はその都度集計し、子どもの得意としていることや苦手としていること、学級全体の傾向などを把握した上で、授業改善を行っていくこととした。また、「西小の学び」(話す・きく編)を子どもが意識し続けられるような掲示を活用し、継続的な指導を行えるようにした。

３　研究方法

○課題意識をもつこととで表現し合うことへの意欲が高まるのか、また「表現し合う力」そのものを高めるための学習過程への位置付けや手立てについて、授業研究を通して実践・検証する。
○公開授業を参観する際に教師が数人の子どもに注目して見取ることで、子どもの主体性を引き出したきっかけや子どもが「表現し合っていた」姿などについて話し合うことができるようにする。
○授業研究会後の協議内容や方法を工夫し、地域住民や講師を招いて外部意見からの活性化を図る。
○「西小の学び」(話す・きく編)を意識させる声かけを継続的に行い、アンケートを活用する。
○実践記録や活用した資料などを蓄積していくために、研究集録を作成する。

４　研究組織



５　研修計画

（１）年間計画

月	実施予定日	内容	備考
４	６日 １９日	・「西小の学び」について ・今年度の研究主題、研修計画について	
５	２４日	・生徒指導	
６	７日 ２１日	・全校公開授業指導案検討①(高５年) ・全校公開授業①(高５年)	
７			ブロック公開授業(中４年)
８	２８日	・全校公開授業指導案検討②(中３年)	
９	２０日	・全校公開授業②(中３年)	
１０	１８日	・全校公開授業指導案検討③(低１年)	ブロック公開授業(高６年)
１１	２１日	・全校公開授業③(低１年)	
１２			ブロック公開授業(低２年)
１	５日	・校外研修会の復伝 ・研究集録、今年度の振り返りについて	
２	７日	・今年度の反省と来年度に向けて	

※自主公開授業「ココ見て授業」…１人１回以上実施

（２）日常的な取組の充実

○　「西小の学び」の徹底

○　読書環境の充実，読書習慣の確立

（学校図書館システムの導入・ビブリオバトルの実施）

○　学年に応じた家庭学習の奨励（家庭学習がんばりカードの活用）

（３）地域とのふれあいを大切にした体験活動の工夫・改善

○　教育課程全体計画の見直し，評価方法の検討

○　コミスク地域コーディネーターと連携した地域素材，人材バンクの活用

６　具体的な取組

（１）国語科の実践…こえに出してよもう「おとうとねずみチロ」（１年）

＜視点①＞　課題意識のもたせ方の工夫

本単元では、幼稚園・保育園の園児に音読発表会をするという言語活動を位置付けた。そうすることで、子どもたちは、園児に上手に音読発表をしたいという思いをもち、単元を通して、一生懸命にチロの様子や行動を想像しようとしていた。また、教師は、登場人物になりきって音読をするために、どの場面でも「この場面はどんなチロですか。」と問うた。そうすることで、子どもたちは、チロの様子が分かる本文「うれしがってとびはねると」「まえよりもこえをはり上げて」等の部分に着目し、登場人物の様子を踏まえて音読を工夫する姿を見ることができた。

＜視点②＞　多様な表現の場の設定と手立て

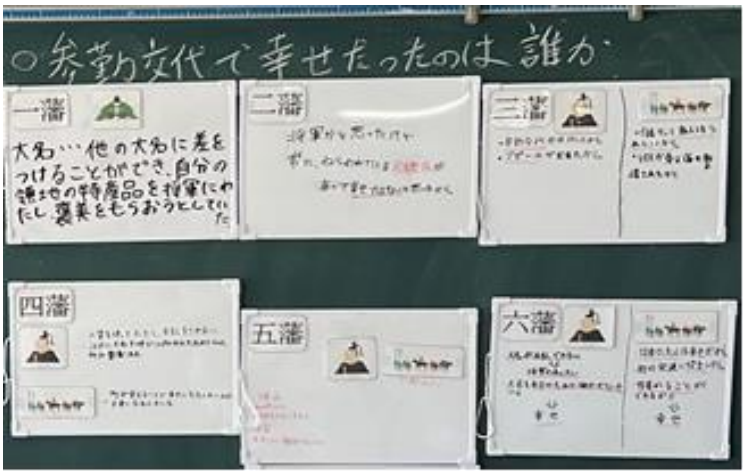
自分たちなりに考えた表現方法を伝え合う場を設定した。表現方法の工夫として、一人で読む「ひとり読み」、数名で読む「合わせ読み」、何人かでずらして重ねるように読む「おいかけ読み」・「ずらし読み」の４つの音読方法を示し、場面の様子に応じて、どの方法を使って表現するとチロの様子がよく伝わるのか、グループで話し合った上で発表を行った。それらの読み方を使いこなすまでには至らなかったが、子どもたちはチロの様子を想像し、チロの気持ちを工夫して表現しようとした。そうすることで、読み方の工夫によって登場人物の様子や気持ちが伝わることに気付くことができた。

班で話し合っている様子

（２）社会科の実践…江戸幕府と政治の安定（６年）

＜視点①＞　課題意識のもたせ方の工夫

単元を通して、「江戸幕府は何故２６０年続いたのか」という課題を子どもたちにもたせた。そのために年表などを用いたり、過去の時代の滅亡について振り返ったりする時間を繰り返し設けた。またこの学習課題を設定することで、江戸幕府の政治体制の確立や人々の暮らしの安定など、外政と内政の両面から考えることができた。例えば参勤交代は各藩に多大な人的・経済的負担を強いていたにもかかわらず、制度として続けられたのは鎌倉時代にできた「御恩と奉公」の関係性が武士の社会に深く根付いていたからという歴史上の因果関係など、過去の政治体制などとつなげて思考を広げられるようにした。



子どもが話し合ったホワイトボード

＜視点②＞　多様な表現の場の設定と手立て

自分から考えや思いを表現するためには、自分の意見が貴重な意見であるということを意識させることが必要である。そこで、本単元ではジグソー学習を取り入れた。たとえば、「参勤交代は必要な政策か」という問いに対して、将軍や大名などのそれぞれの立場になり同じ立場同士で議論するエキスパート学習を行う。その後、エキスパート学習で得た情報を持ち寄り、違う立場同士が集まったジグソーグループで話し合い、参勤交代のメリットやデメリットを考える学習を行う。その後、最初に提示した参勤交代の必要性に関する問いに対して再考する。このプロセスを通して、「大名に負担を強いるため」「江戸で新しいものを得るため」、「大名は子供を差し出しアピールできた」等、多様な考えにふれることができた。また、この学習を取り入れることにより、共同学習で自分しかもっていない資料や考えだということを意識し、伝え合う必要感や責任感を子どもたちはもつことができた。

（３）算数科の実践…「いくつできる？いくつあまる？」あまりのあるわり算（３年）

＜視点①＞　課題意識のもたせ方の工夫

本単元では、たとえば単元後半で扱う「子どもが３５人いて、４人ずつ座ることができる長椅子に

全員が座るためには、何脚必要か」というような問題場面を具体的にイメージできるようにするために、単元の導入から、子どもたちが生活場面を意識するために、どんぐりを使用したり、クラスのグループ分けを例に出したりするなど、身近な題材を用いて授業を行った。そうすることで、自分事としてわり算の場面を考えたり、具体的なイメージがもちやすくなったりした。

先述の問題を解く際には、問題文の理解のために実際の長椅子を準備し、問題と同じように長椅子に子どもたちを４人ずつ座らせ、問題の意味の理解を深められるようにした。その結果、考えてみたい、やってみたいという意識につながった。今回は「これまでの問題とどこが違うか」と教師が発問することで、あまった数の扱い方に子どもたちの関心が高まり、「あまりの数をどうしたらよいのか」という課題意識を子どもたちで共有できたため、話合いに最後まで夢中になることができた。

＜視点②＞　多様な表現の場の設定と手立て

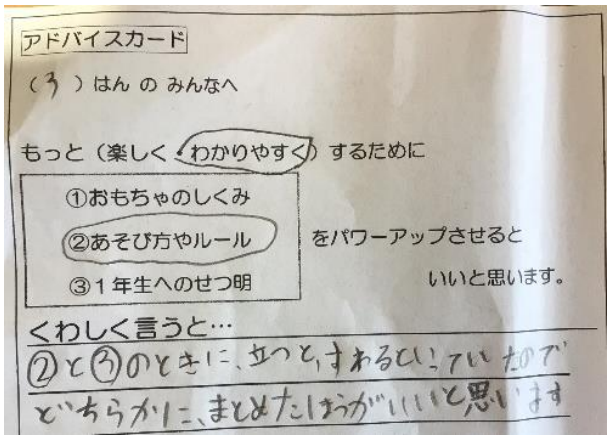
子どもたちが立式し、３５÷４＝８あまり３まで計算をした後、余りの３をどうするかについて考えた際、一人学びでは、必要な椅子は８脚、９脚、３脚という意見が出た。その後、自分の立場をはっきりするために赤白帽子を活用し、９脚だと考えた人は赤帽子、８脚だと考えた人は白帽子、それ以外の人・答えが分からない人は帽子をかぶらないというようにした。全員が同時にかぶることで、一人一人が当事者意識をもって取り組むことができた。また、帽子をかぶることによって誰がどの立場で考えているのかを一目で確認することができたので、子どもたちは同じ帽子の色の人と意見の理由を確かめたり、違う帽子の色の人と、どちらが正しいのか互いに伝えあったりしていた。話合いの後には、赤白帽子の色を変えてもよい時間を作り、友達の意見を聞いて変化があるかどうかを確かめた。赤白帽子を活用したことで、子どもたちの、「違う帽子の色の人に話したい」、「説明したい」という表現意欲がもてたり、変更したことが一目で分かったりし、子どもたちが多様に自分の意見を表現することにつながった。

違う帽子の色の人同士での話合い

（４）生活科の実践…おもちゃランドを成功させよう　「あそんで　ためして　くふうして」（２年）

＜視点①＞　課題意識のもたせ方の工夫

単元の最後に１年生を「おもちゃランド」へ招待するという活動を設定したことで、子どもは常に「自分たちのおもちゃをパワーアップさせたい」「どうすればパワーアップできるだろうか」と意欲的に活動に取り組むことができていた。また、他のグループや他のクラスに遊んでもらってアドバイスをもらうという流れで学習を進める中で、グループ内では満足のいくおもちゃが完成していても、実際に遊んでもらいアドバイスを受けることで、さらに「分かりやすく」「楽しく」遊んでもらいたいという意欲を高め、そのために再びグループで試行錯誤しながら活動を続ける様子が見られた。



子どもが書いたアドバイスカード

＜視点②＞　多様な表現の場の設定と手立て

グループでおもちゃをパワーアップさせる際に、「おもちゃの仕組み」「遊び方やルール」「１年生への

説明」の３つの視点をもたせた。そうすることで、友達のおもちゃやその遊び方について、３つの視点を拠り所にアドバイスを出し合うことができた。また、アドバイスカードに記入することによって、話すことで自分の思いを他者へ伝えることが苦手な子どもにとっても、書くという手段で十分に思いを伝えることができた。

さらに、グループで１枚の分類シートを用いて、各々でもらっていたアドバイスカードをグループの人と共有させた。共有の際には、分類したり、パワーアップさせることを考えたりする過程で思考を深めながらの対話が生まれていた。

７　成果と課題

（１）成果

・＜視点①＞　課題意識のもたせ方の工夫について、子どもたちが自分事として真剣に楽しみながら課題意識をもてるようにするためには、例えば、国語の実践例の音読発表会のように、明確な目標やゴールが見通せることが有効であることが分かった。一方で、算数科のわり算のあまりの扱い方を検討する実践例のように「どう考えたらよいのだろう」と追究したくなる問いをもつことも子どもたちにとっての高い課題意識となることも確認できた。

・＜視点②＞　多様な表現の場の設定と手立てについて、社会科の実践例で「個人→小集団（エキスパート）→小集団（ジグソー）→全体→個人」というように話し合う活動にバリエーションを付けることで、たくさんの思考のプロセスや、様々な人と伝え合う場が生まれ、自分の考えを相手に伝えることへの抵抗感が低下していくことが分かった。また、生活科の実践例で、話合いの視点や話合いの内容を整理するためのワークシートを活用することで、子どもたちが話すための拠り所をもち安心して語ったり、対話の成果を自分たちで分析できるようになったりすることが分かった。

（２）課題

・子どもの話合いや考えを聞く時間を大事にするほど、授業の時間が足りなくなることを実感した。ただ、やはり自分たちで考えを伝え合って解決していく授業の方がより子どもがいきいきと自分の意見を表現でき、理解も深まる。子どもたちから「解決したい」「学びを深めたい」という思いを引き出すためには、問題提示の仕方やタイミング、順序が大切であり、教師の力量にかかっている。子どもが自分の意見を周りに伝えたい、話し合いたいと思うような授業をこれからも考えていきたい。

・特に少人数での子ども同士の学び合いは活性化したが、多人数に対する発信の力は弱い。自らの声が聞き手に伝わっているかどうかをモニターする意識や相手に伝わる表現方法を改善していきたい。

・今年度の研究では、子どもに課題意識をもたせることを大切にしてきたが、基本的には、教師が単元を構想し、子どもの活動の在り方も設定してきた。より子どもの主体性を育むために、自習進度学習等、子ども自身が学びをデザインするような授業の可能性について、今後、検討していきたい。

８　おわりに

今回の研究の柱とした「表現し合う力」を高めるプロセスでは、子どもたちが本気で追究したくなることを課題とすることをめざした。そして、子どもたちが自分たちの考えを表現し合い、それらが課題解決へとつながっていく中で、互いのことを知り、存在を認め合い、あたたかく生産的な学び合いを行うことが、日常の授業でも生まれてきたことも大きな財産となった。そのような学び合いこそが、子どもたちの主体的な学びへとつながると信じ、これからもさらに研究の質を高めていきたい。